
天使と40代独身男

takosashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と40代独身男

【Nコード】

N8709T

【作者名】

takosashi

【あらすじ】

しがない作家志望者のもとに天使が現れる…という物語です。少しファンタジーの要素も入ってますが、いちおう推理ものです。僕の自伝では？ と思われる方もおられるかと思いますが、違います。

川島栄一（42）は、夕食の材料を調達すると、アパートへ向かった。

時刻はまだ、夜の6時だった。さして空腹というわけではない。かといって、飲みに行ったり、夜遊びしたりする金はない。週に3回のアルバイト代が振り込まれるまでは、まだ10日ほどもあった。それまでは懐具合は厳しい。

川島は作家志望だった。子供の頃から、作文の授業だけは得意で、地元の自治体が主催する作文コンクールで、賞をもらった事もあった。高校では文学部に所属し、童話のパロディものとか、人肉食をテーマにしたミステリなどを書きながら、仲間どうしでゲラゲラ笑いあって、俺には才能がある、いつかプロの作家になってやるんだ、と極めて楽観的、短絡的に自分の将来を思い描いていた。

そして、程なくして、川島はプロの世界の次元の違いを思い知らされることになった。

地元の大学を卒業し、就職活動はせず、両親の猛反対を押し切って、執筆に専念することにした。

1度だけ、ある雑誌の主催する文学賞に応募した。一時審査通過者のリストに自分の名前を見つけたときは、有頂天になった。それみる、俺には才能があるんだ。賞金は100万円だというが、何に使おうか、と、すでに自分の著作が書店で平積みになっているさまをありありと思い描いていた。

しかし、二次審査において、川島の名前は消えていた。そんな馬鹿な…俺の作品のどこが悪いというのだ。

それからというもの、川島はかつての楽観的な「作家志望者」ではなくなった。何を書いたらいいのか、何を書いたらいけないのか、わからなくなった。10ページほど書いては、俺はこんなものを書いていていいのか、と不安になってしまう。また勉強のために、と小説を読み始めても、はたしてこんな作品が自分のためになるのか、という思いがわき、打ち捨ててしまう。

よほどの天才は別として、自分のような凡人は、役立たずの代物をそれこそ山というほど書き、ようやく「本物」が見出される、ということとはわかっていた。だが中途半端な文才が災いし、プライドを捨て切れず、月日は流れ、料理ばかりが上手くなった。そうしていつしか、人生の折り返し地点が近づいてきた。もはや最近では、小説を書くこともほとんどなくなっていた。

いまさらサラリーマンになるわけにもいかなかった。ただでさえ失業者が巷にあふれかえる中、40過ぎの男など、どこの企業も、履歴書を見ただけで却下してしまうことは分かりきっていた。

(家業を継いで、嫁さんをもらうのも悪くないかな…)

川島はそんな風に思いつつ、アパートに帰り着いた。

そしてドアを開けたとき…

「おかえりなさいまし！」

いつの間にか、女が上がり込んでいた。

「な、な…?!」

「お夕食、できてますよお」

「き、君は誰だ？」

「わたくしは天使です。あなたの願いをかなえに来ました。夕こ

飯はサービスです」

まだ「女の子」といっていいぐらいに見えた。自分のことを「天使」などと言ったが、新車のデリバリーヘルスの宣伝じゃないか、と川島はやや冷静になった頭で考えた。

「申し遅れました。わたくし、イヴェンナと申します！」

「…どこから来たの？」

「あら、天使ですもの、天使界からに決まっておりますわ」

川島はもう一度、イヴェンナと名乗る少女を観察した。確かに浮世離れた雰囲気があった。白いフレアスカートから覗く脚線美は、思わず息を呑むほど美しかった。上半身は胸の谷間が少し見えるくらいに襟のあいたブラウスで包まれており、栗色の髪は腰に届くほど長かった。

ちょっと色っぽいコスプレかな、と川島が思ったとき…

イヴェンナの背中から、うっすらと影のようなものが突き出ているのに気づいた。

そして、障子紙に映された影を見て、川島は驚愕した。

翼…？

まさか本当に？

イヴェンナは川島の驚きを察したように、

「ああ、これですか？ お見えになります？」

「本物の…天使？」

「左様でございますわ。お夕食、召し上がりませんか？」

川島はイヴェンナの作った料理を食べながら、

「願いをかなえる、って言ったね」

「はい」

「ここで僕と暮らしてほしい、っていうのはダメかい」

「あら、それはできませんわ。わたくしは天使界に帰らねばなりませんもの」

「…そうだろうね」

確か、似たようなシチュエーションのマンガがあっただけ…

ともあれ川島にとって、若くて元気な女子と話をする事など、実に久しぶりだった。

得体の知れないところがあるけど、しばらく楽しんでみよう、と考えた。

小説家になりたい、と頼んでみようか？

いや…待てよ。俺は自分の小説を世間に認めてもらいたいのだ。

自分で勝手に「俺は小説家だ」と言えば、小説家には違いない。だが…それではダメなんだ。

「願いというか、教えてほしいことがある」

「はい、なんでしよう？」

「僕は小説家になれるだろうか？」

イヴェンナはきよとんとし、それから考え込んだ。

「…難しいですわね」

「やつぱり、ダメかい？」

「いえ、そうではございません。あなたが小説家になれるかどうか、見極めることが難しい、と申し上げたのです」

「…」

確かに難しい。それに、小説家になれるかどうか、などと他人に訊いているようでは、すでに望みは絶たれている、という気もする。

「そうですね、それではわたくしが、ひとつの問題を差し上げま

す。それを解いてくださいませ。そのうえで、小説家になれるかどうか、ご自分で判断なされては？」

「へえ…もし、問題が解けなかったら？」

「残念ながら、何も差し上げられませんわ」

「いいだろう、問題を言ってくれ」

イヴェンナは語り始めた…

天使界に、ひとりの剣の使い手がおりました。その名をイムジオといい、比肩する者なき達人として、その名を知らしめておりました。

イムジオがある日、剣の修行に励んでおられますと、達人といえどたまには不覚をとるもの、命の次に大事な剣を、その手から弾き飛ばしてしまいました。そして、ぽちゃん…と音がしました。剣はどこか、水の中に落ちたものに相違ございません。

イムジオが音のした方へ向かっていきますと、3つの泉が並んでおりました。剣はそのうちのどれかに沈んでいるはずです。

1つ目の泉は、「竜の泉」といいました。その泉の水を飲めば、体は竜のように頑丈になり、どんな剣で突かれても傷ひとつ負わないようになる、とされておりました。

2つ目の泉は、「鷹の泉」といいました。その泉の水を飲めば、鷹のように眼がよくなり、どんな敵の剣も見切れるようになる、とされておりました。

3つ目の泉は、「猫の泉」といいました。その泉の水を飲めば、猫のようにすばしこくなり、どんな剣もかわすことができるようになる、とされておりました。

さて…イムジオはどうしたでしょう？

「それが…問題？」

「はい、そうですわ」

「やっぱり、俺、才能ないかな…」

「…なぜでしょう?」

「問題の答がわかったからさ。剣が沈んでいるのは、3番目の『猫の泉』だ」

「ほう…なぜでしょう」

「しょうもない言葉遊びだ。ネコノイズミ、とローマ字で書くとこうなる」

川島は、手近にあった紙に、こう書いた。

NEKONNOIZUMI

「逆から読んでみる。イムジオノケン…つまり、イムジオの剣だ。僕がトリックに詰まったとき、よくそっちの方に走るネタだよ。それをやると、ミステリではなくパズル小説になってしまうがね」

イヴェンナはそれを聴いて、悲しそうに川村を見つめた。

「お見事、と申しあげたいところですが、不正解ですわ」

「えっ?」

「問題では、イムジオはどうしたか、と問うておりますが、剣が沈んでいる泉はどれか当てろ、とは問うておりません。イムジオは3つの泉の水をたらふく飲んだ…というのが、正解ですわ」

「は…」

川村は口をぽかんと開けた。

「どんな剣でも傷つかず、どんな剣でも見切れ、かわせるのなら、もはや剣など不要…とイムジオは悟ったのです。棒切れひとつでも、誰にも負けない…という自信がついたのですわ」

意表をつかれたが、川村の心にひらめくものがあつた。

イヴェンナが言った。

「いかがでしょう？ お役に立てましたでしょうか」

「ああ、ありがとうございます」

「それでは…」

イヴェンナは消え去り、川村の胸中に、希望めいたものが、ほんの少し浮かんだ。

（また、初心に帰って、がんばってみるかな…）

（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8709t/>

天使と40代独身男

2011年10月9日01時49分発行